

栗田城址と くりたのさと

史跡
栗田城址

水内総社日吉大神社 宮司 斎藤安彦 書

栗田城址を整備する会
長野県地域発元気づくり支援金活用事業

栗田城址

栗田氏歴代の居館跡は、栗田城・堀之内城と呼ばれていました。

城は、800年ほど前の平安時代末期（1190年頃）、栗田寛覚の子仲国によって築かれたといわれています。

戦国時代の末期に、栗田氏が上杉景勝の家臣として会津に移りましたので、築城後400余年経た江戸時代初期に取り壊されました。

「栗田城」の史料での初見は、「建徳元年（1370）、信濃守護が栗田城西木戸口で交戦した。」と上遠野文書に記述があります。



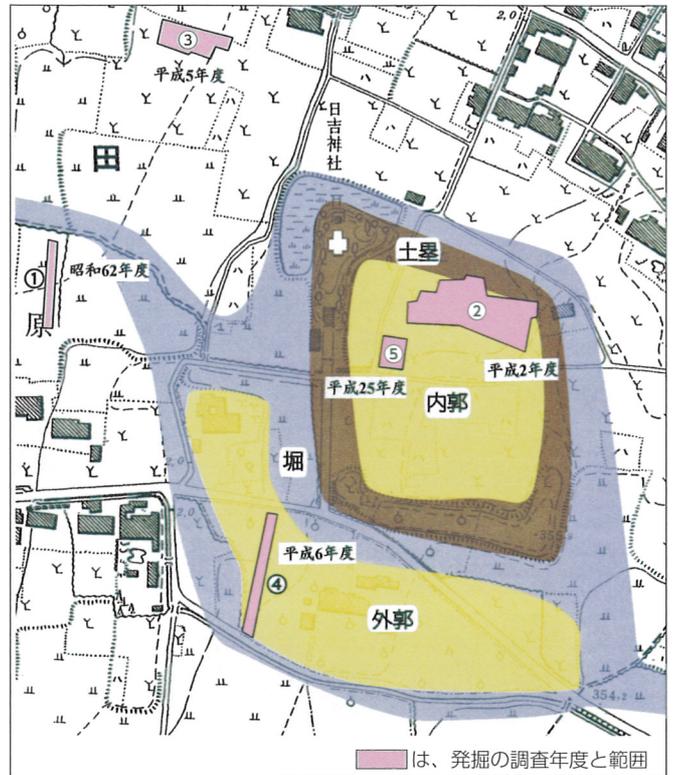
現存する栗田城土塁

近年の調査では、二重の堀をめぐらした複郭式平城で、東西709m・南北1,090mの回字形でありまして、長野市においては最大規模の居館跡といわれています。

現在、内郭跡には西から北にめぐり幅11m、高さ9m、長さ40mほどの土塁が残っており、その北西隅に栗田神社が鎮座しています。

土塁を囲っていた西側と北側の堀は、昭和30～40年代に埋められて公園と道路になりました。

栗田城址想定図



栗田の地名

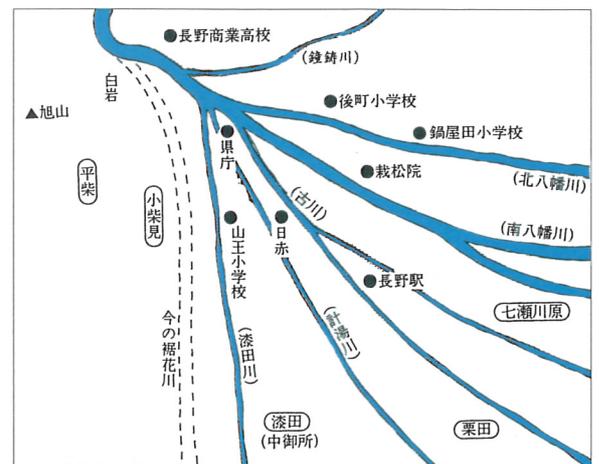
裾花川は、江戸時代初期に河道が変更されるまで、安茂里の白岩付近で直角に曲がり、「手の平」のように幾つかに分流していましたが、本流の川筋を辿ると、妻科～新田～七瀬～高田～長池～布野方面を経て、千曲川に合流していました。

裾花川の右岸（南側）には、微高地（自然堤防）が形成され、「大字鶴賀高畑」という地籍名があるように、NTT信越支社北側付近から南千歳町の社堰（栗田堰）南側にかけて段丘が確認できます。

栗田の地は、この微高地の延長線上にあり、水流によって削られた丘（台地）から、「栗田」といわれたと思われます。

「栗」は、「えぐる」（削）、つまり、「くる」→「くり」に由来しており、縁が水によってえぐ（削）られた地形を表しています。

阿南町鴨目にあります「上栗田（えぐりだ）」は、地名の発音の上でも参考になります。



旧裾花川の水路

栗田氏

栗田氏の祖である栗田寛覚（範覚）は、1094年に配流され村上郷に住した村上一族の為国の子といわれています。

水戸栗田系図の栗田寛覚の傍注に「栗田禪師初めて栗田郷に居住す。依って本名村上を止めて在名栗田と号す。」とありますことから、村上氏の分家にあたります。

当時の栗田を含む芋井郷は、園城寺(三井寺)・聖護院の荘園、或いは、公麻田^{くげでん}であったということから、この地頭に就いたのでしょう。

また、栗田寺を建立したり、戸隠寺(顕光寺)の別当にも就き、その後、寛覚の弟の寛明の頃から、善光寺の別当(権別当、又は、堂主)も兼務しました。室町時代の頃から、戸隠寺別当の「山栗田」と善光寺別当の「里栗田」に分かれて、それぞれ一族が継承していました。(山栗田は、長祿2年(1458)まで別当職に就いていました。)

15世紀後半の寛慶の時代が絶頂期で、善光寺から犀川までの現市街地を治めるほどの勢力があったといわれています。

寛慶寺年譜では、「寛慶の子、寛安は、明応6年(1497)に、善光寺東門に寺を建立して、栗田村の栗田寺を移し、父の名を取り寛慶寺と改めた。」とあります。

なお、明治の廃仏毀釈において、戸隠寺(顕光寺)の奥院の仁王像は、戸隠神社との関係もあってか寛慶寺に移されて、本堂に安置されています。

戦国時代の栗田氏

栗田氏は、武田氏の北信濃侵略を契機に、武田・上杉の両雄に翻弄^{ほんろう}され、生き残りを懸けた選択を強いられました。

栗田鶴寿(法名)は、天文22年(1553)の第1回川中島合戦では、上杉方に与^{くみ}していましたが、天文24年(1555)の合戦では、武田方に属し、「朝日の城」に入り、守り通しました。

その後、鶴寿は、信玄の善光寺本尊の移転に伴い、善光寺を奉じて本尊とともに甲府へ移り住み、甲斐善光寺別当となりました。

信濃に残った栗田氏の武士は、弘治3年(1557)に長沼城主島津氏の撤退後、武田方が築造した長沼城の番衆などを果たすこととなり、天正10年(1582)3月の武田氏滅亡までの20余年の間、長沼で過ごしたので、長沼には、栗田氏の武士が居住しました「栗田町」の地名が残っています。

武田信玄没(1573)後、跡を継いだ勝頼は、天正2年(1574)、徳川家康から奪取した遠江(静岡県)の高天神城を守るよう城将岡部元信と共に栗田鶴寿に託しました。しかし、足掛け3年の防御及ばず、天正9年(1581)徳川軍に敗れ、鶴寿らは城と運命を共にしました。

鶴寿の子永寿(法名寛喜)は、武田氏滅亡後も代々の新領主から甲斐善光寺別当を任されましたが、慶長2年(1597)の秀吉による京都・方広寺への本尊移転に際しては随行せず、信濃へ戻り、その後、上杉景勝の招きで米沢に3年ほど過ごした後、慶長8年(1603)に別当の復職を大本願へ願い出ましたが叶いませんでした。

一方、武田氏滅亡後、上杉景勝は、信濃に進出してその年の6月には北信濃四郡を掌握しました。

信濃の栗田氏は、景勝から本領の安堵を受けまして、忠勤を誓い仕えることとなりました。

上杉氏の武将となりました栗田刑部は、天正13年(1585)の家康による真田昌幸討伐の「上田合戦」に際して、一時退いた家康軍の再攻撃に備え、景勝から昌幸を支援するよう命じられ、島津忠直・岩井信能と共に伊勢崎城(上田城)の増強普請を行いました。

また、天正18年(1590)の太閤検地に関しては、上杉氏が担当した出羽において、庄内藩(山形県)藤島の警護を行い、天正19年(1591)には、岩代(福島県)一揆を鎮圧しまして、景勝から誉められたほか、天正20年(1592)9月には、秀吉の命により、庄内藩・藤島一揆の残党を討伐するなど活躍していました。

慶長3年(1598)の秀吉の命による上杉氏の会津移封に伴い、景勝の家臣(信夫郡大森城将…8500石)として会津に移りました。この際の「兵農分離令」により、帰農を志望した栗田氏の一部は、「西島」に改姓の上、信濃に移り住みました。

慶長5年(1600)、栗田刑部は、「関ヶ原の戦」に際し、景勝の石田三成に応じて兵を挙げることに反対しまして、会津から脱出しようとしたのですが、白河口で直江兼続の軍によって家族共々成敗されました。

栗田城址の出土品

長野市埋蔵文化財センターにより、昭和62年から平成25年の間、栗田城址の発掘調査が5地点で実施されました。

遺構では、中世（1192～1573年）の掘立柱建物跡と竪穴状建物跡が多数検出されました。なお、内郭には15世紀前半の火災痕跡がありました。

遺物については、古瀬戸の天目碗・平碗、北陸産のすり鉢・壺・甕、輸入陶器の白磁碗・青白磁梅瓶、そのほか、石臼・硯・石鉢や小銅仏（阿弥陀如来）・宋銭なども発掘されています。

茶道・香に関する遺物が多く、国人の領主としては比較的高価なものを所持していました。

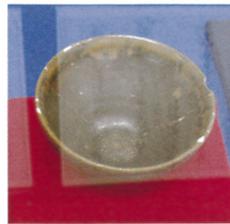
主な出土品



硯 (すずり)



風炉(ふろ)の破片



古瀬戸天目碗



宋 銭



かわらけ



石 臼



高さ10cmの小銅仏
(左手を刀印に結ぶのは善光寺式の特徴)

江戸時代以降の主な栗田氏一族の特記

・栗田源右衛門 (久吉・伝右衛門) (1614～1690)

永寿 (寛喜) の子で、慶安5年 (1652) に庄内藩主酒井忠当に200石で仕えました。栗田家の重宝 (信玄・勝頼・家康等の判物…花押のある文書) を伝えました。また、この子久重は、「寛喜の墓」を再建したといわれています。明治の初期に上西之門の屋敷から寛慶寺に移されました。

・栗田寛祐 (不明～1656)

戸隠の栗田寛祐は、慶長3年 (1598) に戸隠神社の神職 (社家) として取り立てられ、奉仕することとなり、以後、明治維新後まで一族が継承しました。

豊岡・二条にありました居館跡の「城之内城跡」と、執務していました「達書場跡」(現在、栗田家の墓地) は、長野市の史跡となっています。

・栗田寛斎 (1841～1898)

栗田一族では、戸隠神社の最後の神職となりました寛斎は、明治19年 (1886)、戸隠を去り上水内郡野尻に移住し、宇賀神社の神職に就きました。野尻では、私財を投じて、用水路の整備、野尻湖立ヶ鼻～琵琶島間への架橋 (約500m) 等を行い、地域の発展に尽すと共に、近隣神社の神職も兼ねました。なお、末裔は、松本市に居住しています。

・栗田八郎兵衛

栗田刑部国時の三男寛政は、水戸家創立の際、400石で仕えました。寛政から5代目の寛親以降代々「八郎兵衛」を襲名したため定かではありませんが、元禄5年 (1692) に、6代 (寛大) の八郎兵衛が柳沢吉保を介して栗田家伝来の「御宝印」3個と「十夜仏」を善光寺に寄進しました。これが今日の「御印文頂戴 (正月7日～15日)」の儀式に使用されます御印文であり、十夜仏は、「十夜会」の儀式 (10月 (大本願) と11月 (大勧進) の5日～14日) の際に開帳されています。

また、弘化4年 (1847) の地震による栗田神社拝殿の損壊に際して、12代 (寛能)、又は、13代 (寛猛) の八郎兵衛が、1両1分を再建費用として寄附しています。

なお、14代 (寛剛) の八郎兵衛は、幕末の騒乱期、天狗党に加わり、以後家督相続不明となっています。

・栗田寛 (1835～1899)

水戸藩の大業「大日本史」の編纂に尽力され、その後、東京帝大の教授となりました。

水戸の油商の家に生まれましたが、水戸藩の彰考館での大日本史編纂業務に携わりました。

水のあまふしやひよしだいじんじや
水内惣社日吉大神社 (栗田神社)

応永年間 (1394~1428年) に、栗田氏が比叡山 (延暦寺) の守護神「日吉山王社」を勧請したと伝えられています。

江戸時代末期から明治時代にかけての社名の改称や明治政府の指示による村内各神社との合併を経て、栗田城址に鎮座しています。祭日は、春 5月3日、秋 9月23日です。

境内には、高札場や種々の記念碑があります。



水内惣社日吉大神社社殿



記念碑 (高松宮殿下御成)



高札場



記念碑 (栗田城址)

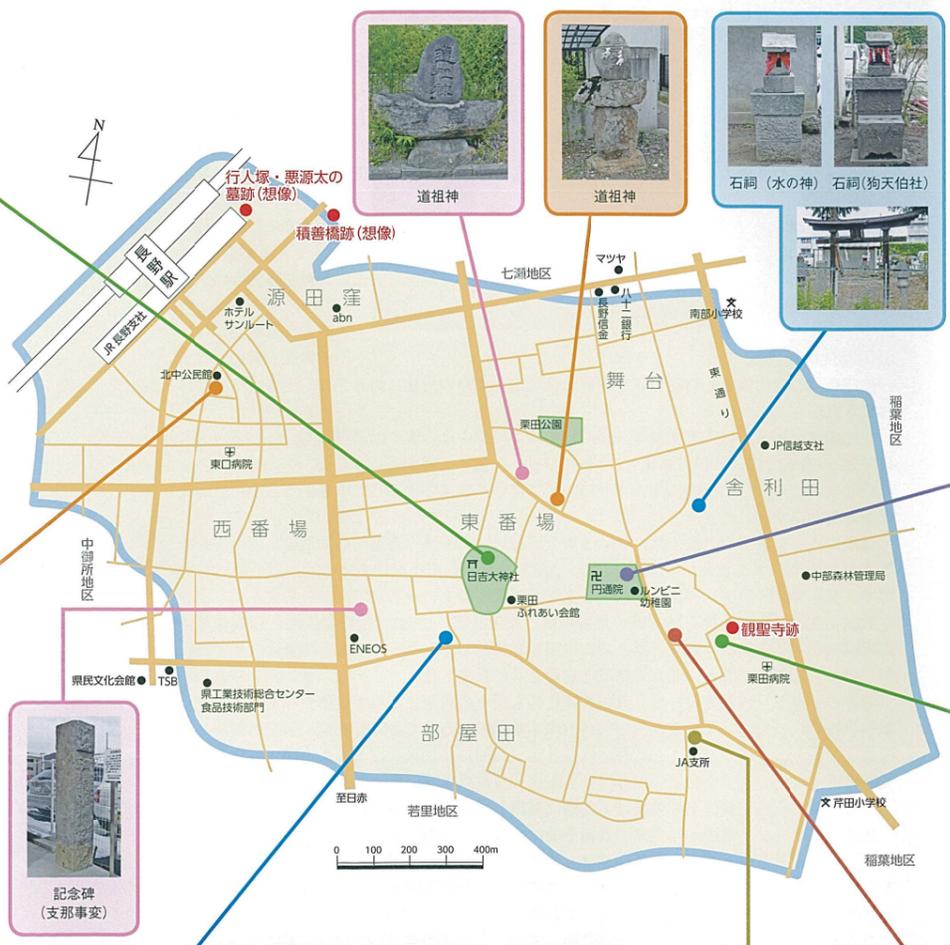


道祖神 庚申塔 道祖神
地蔵菩薩坐像 (子安地蔵) 石祠 (養蚕社) 庚申塔



石灯籠 石祠 (養蚕の神) 納経塔 (廻国供養塔)

くりたのさと 史跡マップ



道祖神



道祖神



石祠 (水の神) 石祠 (狗天伯社)

円通院

青木正義氏の調査書では、「創設年不詳。17世紀半ば頃、西方寺9世単誉雲秀の弟子達現和尚 (不明~1699) により再興され、明治6年 (1873) 廃して民有に属したが、いくばくも経ず復帰し、現在に至っている。」とあります。

お堂は、文化2年 (1805) に改築された後、平成17年10月に建替えられました。

墓地には多くの供養塔、地蔵菩薩、筆塚等があります。特に、明和5年 (1768) に建立された三界萬霊塔は、作成された年代が判る栗田地域の石造物では一番古いものです。



円通院本堂



地蔵菩薩坐像 (延命地蔵)



筆塚 (宮崎松栄)



筆塚 (説鷲和尚)



地蔵菩薩坐像 後 (延命地蔵) 前 (子安地蔵)



庚申塔



月待塔 (二十三夜塔)



納経塔 (南無阿弥陀仏)



庚申塔



三界萬霊塔



筆塚 (水内氏塚筆塚銘并序)



道祖神



庚申塔



道祖神



月待塔 (二十三夜塔)



納経塔 (經典供養塔)



記念碑 (芹田村役場跡)



原図の寸法 縦三三二cm 横二九二cm

明治以降に失われた史跡等（長野県町村誌等から）

行人塚

「栗田村の源田窪に方9尺、高さ3尺の石塚にして『善光寺七塚』の内なり。」と町村誌に記されています。塚は、栗田寺別当大法師覚を埋葬したものと伝えられていますが定かではありません。

明治21年の信越線敷設に伴い取り壊されました。



行人塚（写生画）

悪源太の墓（写生画）

悪源太義平の墓

源頼朝の兄・義平（1141~1160）を弔らうため、越前穴馬村の「お光」が善光寺へ参拝し、源田窪の地に遺骨を埋葬したと伝えられています。墓は、行人塚と同様の理由で取り壊されました。地名の「源田窪」は、これに由来しています。なお、「相伝悪源太義平の墓」は、北中（個人宅）に祀られています。

観聖寺

「舍利田に、寛永14年（1637）舜漁良開山、新義真言宗修験伊勢国渡会郡中本山世義寺の末寺」と町村誌にあります。本尊は、「聖徳太子像」です。栗田村観聖寺縁起では、「天正3年（1575）の長篠の戦に参戦し討死した栗田刑部は、出陣の際に聖徳太子掛図の散失を案じて栗田の地に聖徳太子像を埋めた。僧舜漁良が善光寺参拝のおり、まどろにみた夢によって太子像を発掘した。」と書かれています。

寺は、明治11年（1878）に廃止されましたが、太子像は、現在も吉田氏宅でお護りされています。



聖徳太子像 木造高さ47cm

積善橋（積木先橋）

「鶴賀村（七瀬）との境の長野（栗田）街道にあり、待居堰の流れに架かる、幅9尺・橋長7尺3寸の石造りで、『善光寺七橋』の一つ」と町村誌にあります。長野（栗田）街道は、鉄道敷設による分断や近年の区画整理で、はっきりしませんが、「しまんりょ」小路（名称は島の寮に由来）の部分（約200m）は、石畳に改修され残されています。

【主な参考文献】

長野市誌 長野市の石造文化財 上水内郡誌 善光寺史 善光寺史研究 長沼村史 水戸史学75号 長野県神社百年史 近世栗田村古文書集成 戸隠総合学術調査報告書 米山一政著作集 長野県史 長野県町村誌 信濃史料叢書等